に命じて佛の加被力に依て佛の代りに大乘の法を菩薩の爲に說かしむるなり。故に轉敎付財と云ふ佛聲聞に說かしむるは、二乘をして大乘の法に通達せしめんが爲なり。然れども二乘自らは大乘の法門は菩薩の所修にして我等二乘の修すべきものに非ずと思へり。又槃若にては小乘の法門も大乘の法門も一切の法皆摩訶大乘と說いて但法に大小別なきを顯す、故に槃若は法を開會して未だ人を開會せざるなり。

若し華嚴三照の例の中には次照平地の攝あり。食時の次の偶中として丁度十時頃に當れり、故にまだ物に蔭の出來る時分なり、又涅槃五味の中には熟酥味に例ふ。即ち大を信ずる生酥味より大に通ずる熟酥味を出すなり、これ方等の後摩訶槃若を說き出すとあり。

法華の信解品に云く、是時長者有レ疾自知二將死不レ久語二窮子一言我今多有二金銀珍寶一倉庫盈溢其中多少所應取與云々。

是の文に於て四大聲聞よく轉敎付財融通陶汰てふ槃若の部意を領解せり。

以上鹿苑方等槃若の三時は漸次に淺きより深きに至らしむれば華嚴頓大に對して總じて漸敎と名くるなり。

論相承與付囑關係

佐藤秀温

天　總　論

宗敎とは宇宙絕對の眞理を開出し、而して十界の中央たる人間界を根本とし、一種崇高偉大にして吾人をして敬畏すべき感情を起さしめて、人心の奧底を支配し、之を人格化して信仰し、人生の缺陷を補はんとするものにして、往ては國家安泰の基礎を立て、又世界文明の本源とも稱すべきものの是也。而して宗敎には多種ありと雖も、佛敎を除くの外は皆な外典外道あり。其の外道の所詮は內道に入る即ち最要なり。或る外道の云く、千年已後佛出世す等云々。又或る外道の云く、百年已

後佛出の等云々。外道外典の四聖三仙は其の名は聖なりと雖も實には三惑未斷の凡夫、其の名は賢ありと雖も實に因果を辨へざる事嬰兒の如し、彼を船とし生死の大海を渡るべしや。彼を橋として六道の巷越ゑ難く、彼を柱として國運全からず。故に佛教と外道と其の間霄壤の差ありて外道の佛教に及ばざるや遠し。

今を去る三千年の昔に於て南閻浮提の中央、印度に降神せられたる大聖釋迦牟尼佛、五十年間に渉り開展せられたる佛教は、内に八萬四千の法門を包含し、外には迷妄に流轉せる衆生救濟の偉力を有する尊無過上最勝無二の宗教なり。單に佛教と稱するも亦多種にして、所謂大小偏圓顯密權實本迹等の別あり。然りと雖も、大略すれば自ら四十二年末顯眞實の方便と最後八ヶ年の法華眞實との區別あり、要するに法華八ヶ年の眞實教の外は無量有りと雖も、是れ之が枝葉に外あらずして實に佛教の眞髓を說けるものは無二亦無三唯一法華一乘のみなり。故に方便品に云く、『十方佛土中唯有一乘法無二亦無三除佛方便說』と、又無量義經說法品に云く『種々說法以方便四十餘年未顯眞實』等と云々。而して大集經には正像末の三時を說示し後五百歲には鬪諍堅固白法隱沒の時にして、唯法華の大白法のみ廣宣流布すと。されば四十餘年の經教は古曆昨食の如くに末法に於ては恰も星月の日光に其の光明を奪はると等しく其の益減沒するものなれば、宜しく法華實教を取り爾前迹門等の權教を捨てざるべからず。今是を圖示し以つて取捨簡擇せば、

内外相對
- 捨……(外)……波羅門、儒、基督、天理、黑墨等
- 取……(内)……大小、權實、本迹、一切佛教

大小相對
- 捨(小)小乘ノ劣(阿含三藏教等)
- 取(大)大乘ノ勝(權大、實、本、迹)

權實相對
- 捨(權)權大ノ劣(華嚴、眞言、禪、念等)
- 取(實)實大ノ勝(法華本迹)

本迹直對
- 捨……(迹)……迹門ノ劣(迹門教經ノ劣)
- 取……(本)……本門ノ勝(本門教經ノ勝)

故に進んでは前四教、退いては涅槃經等の一代諸經惣じて之を括るに但だ一經也。始め寂滅道場より槃若經に至るまでは序分也、無量義經、法華經、觀普賢經の十卷は正宗也と。而して此の正宗の中の正宗は妙法蓮華經の五字に皈する也。故に報恩鈔（遺文廿一、七七ページ）に云く、佛の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに、妙法蓮華經とかゝせて如是我聞と唱へさせ給ひしは、妙法蓮華經の五字は一部八卷二十八品の肝心にあらずや云々と。故に法華經第七に云く『佛說言諸經中王』と。又靈山の聽衆たる天台大師の云く、『今經則成諸經法王最爲第一』と。又妙樂大師の云く、『法華之外無勝法故云法華無上法王也』と。又傳敎大師の云く、『如佛爲諸法王此經亦復如是諸經中王』と。當に知るべし法華は無上の妙典なる事を。然りと雖も世尊在世の衆生救濟を主とし末世の爲めに之を付囑せず、人師又後代の衆生を哀愍せずして相承せずんば、如何に深甚微妙の大法ありと雖も何等後世に利益を施すこと無く死物に等しかるべきを脫れざらん。彼の淺劣なる外道の基督及び天理等も付囑相承に依りて盛花を咲かすに非ずや。彼の周の世に於ては建國の基礎を開立せし已來、德を修め賢を禮して頻りに仁政を奬勵し代々之を相承し最盛を極め範を後世に垂れたるに、時移り代かはりたる秦の世は之を相承せざりしかは、天下さながら暴風の一時に荒れすさぶが如く、群雄四方に割據して滅亡の淵に沈みしに非ずや。されば付囑相承あるものは、小にしては一家、大にしては一國に於ても缺くべかざるもの也。況んや一家一國はをろか、世界人類を支配する佛敎、其中の最勝なる法華經を依經とせる本宗は理想實現の基礎にして、之を除外しては安ぞ活宗敎たるを得べき。而して付囑によりなれる相承多種ありと雖、大別すれば當家の內相承、台家の外相承此の二樣にして、之を詳別すれば當家內相承に內外の相承、台家の外相にも亦內外の二相承あり今外の別の中に於ける內の語を冠する所以は、一往歷史的說明に擇ぶが爲めあれども、再往之を論

ずれば内證の深勝ある事を顯すもの也。而して今相承、付囑、を論ずるに於ては、彼の印度出現垂迹を釋迦牟尼佛を根據とするには非ずして久遠本佛を以てす。壽量品に云く『皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三貌三菩提云々』又云く說我小出家得阿耨多羅三貌三菩提然我實成佛已來久遠若斯但以方便敎化衆生令入佛道作是說』と說示し、彼の印度出現の佛は、垂迹示現にして其の實は五百塵點久遠の本佛あることを顯示せられたり。されば付囑相承もそれが如くならざるべからず。然りと雖も迹化の付囑は開顯後にあるも所付の法體は全く顯本已前の迹門に同じくして、此の法本と像法の時宜に適ひ當時の群類を救濟して本化所付は壽量文底の大事本門肝心にして末法に於て閻浮に廣布せんことを示され、末法の衆生救濟の爲めにありしものにして、而して付囑相承たるや宗旨の生命を持續せしむべきの大綱をなすもの也。妙宗の學人之を精究せずんば本佛の本懷を知らず、故に吾人は不肖を顧みず本化の末流として相承と付囑との關係を論ずる所以也

本論に至りて付囑の意義を明し、尙總別の起盡並に本化迹化の弘通の狀態を明にし、次に相承の意義を明し、而して本化迹化二樣相承の形態を明し、更に進んでは相承と付囑との交涉を述べ以つて其の根據を取捨し、最後に吾相承付囑に於ける私見を述べて以つて結論とする也(つゞく)

秘論

山岡義哲

第一章　宗旨論
本
第二章　本門本尊
第一項　本尊名義
第二項　曼荼羅相
第三項　本尊本体
イ　敎門本尊
ロ　視門本尊